

## 近世～近代の相模国津久井郡牧野村の集落構成と生業形態

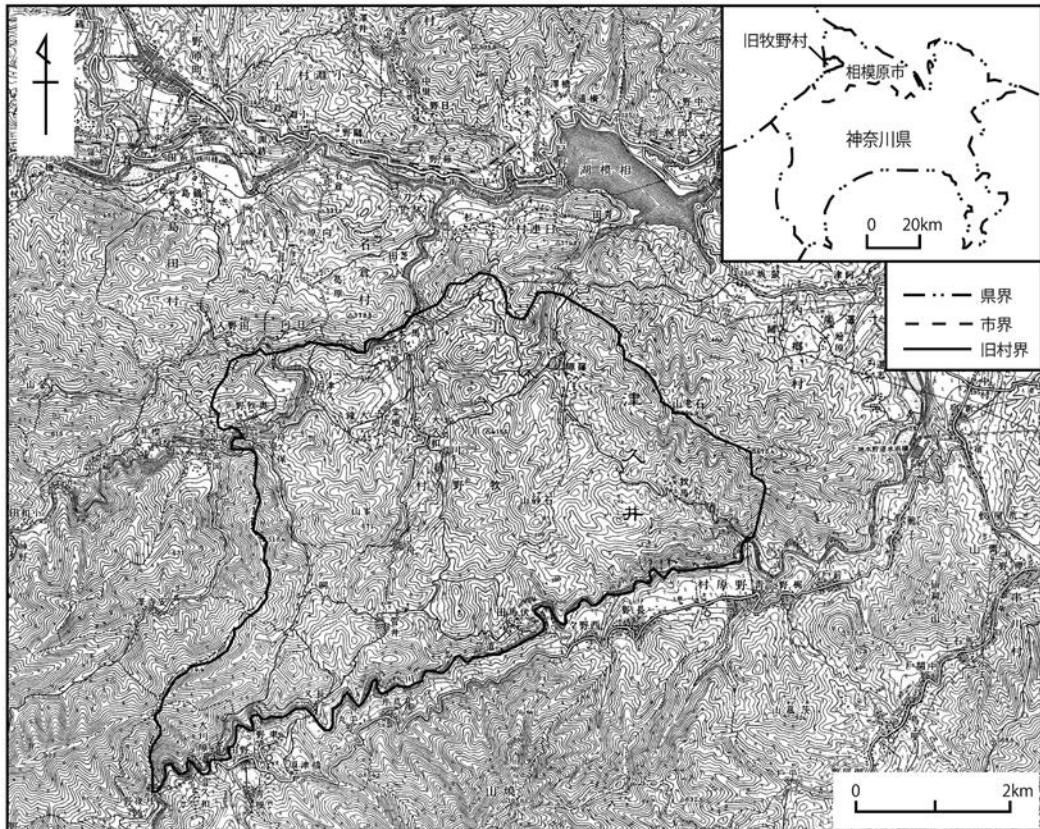
高橋 淳・王 君香・中西僚太郎

### I. はじめに

現在は神奈川県相模原市緑区の一部となっている旧津久井郡牧野村は、県の西北に位置し、西は山梨県に接する（第1図）。北は相模川、南は道志川に挟まれた山間地域であるが、周辺地域のなかでは、傾斜が緩やかな斜面が比較的多く広がっている。古くはこの丘陵地状の地形を利用した馬の放牧地であり、牧野という地名もそれにちなむという説がある<sup>1)</sup>。

牧野村は、戦国期は後北条氏の支配下にあり、「小田原衆所領役帳」のなかにも、その名がみられる。近世初期には天領となったが、寛文4（1664）年下総関宿藩領となり、貞享元（1684）年には、再び天領になった後、文政11（1828）年には小田原藩領となった。近世の村高は約1,240石余、家数は約300戸余であった<sup>2)</sup>。

明治22（1899）年、町村制の施行により、単独で明治の行政村としての牧野村となった。昭和30（1955）年、佐野川村、日連村、名倉村、吉野町



第1図 牧野村の位置と立地環境  
（5万分1地形図「上野原」（昭和22年資料修正）により作成）

と合併して藤野町が発足した。平成19（2007）年、藤野町が相模原市に編入され、平成22（2010）年、相模原市が政令指定都市に移行し、旧牧野村域は緑区の一部となった。

このような牧野村は、谷が複雑に入り組んで、平地が少ないという地形条件の影響から、多数の集落が村内に分散して立地している。第1図の昭和22（1947）年の地形図からは、名称が記された集落として、牧馬、篠原、大久和、馬本、吉原、堂地、大鐘、小津久、奥牧野、舟久保、川上、小舟、綱子、菅井、大川原、長又、伏馬田の17集落を認めることができる。また、昭和26（1951）年の『村勢要覧』<sup>3)</sup>によると、牧野村内は、22の「部落区」に分けられていた。近世には時期によって変化はあるが、おおよそ16の組（組を村と称する場合もある）から構成されていた。津久井郡では、近世の藩政村のなかに複数の集落を持つ場合が多いが<sup>4)</sup>、牧野村のように16もの集落から構成される事例は他にみられない。これは牧野村の大きな特徴といえ、歴史地理学的には注目すべきことである<sup>5)</sup>。本研究の第一の課題は、このような牧野村内の集落の構成は時期によってどのように変化したのかについて検討することである。第二の課題は牧野村の生業形態の検討である。その検討においては、近世～近代にかけての生業形態を通時的に概観するとともに、昭和20年代における農業に関して集落別に検討を行った。

ところで、近世の牧野村については、木村編において津久井郡の村々の1つとして取り上げられ、概略的な検討が行われている<sup>6)</sup>。また、藩政村内に非常に多くの集落を内包するという牧野村の特徴に関しては、木村が特質すべき事例として取り上げ、検討を行っている<sup>7)</sup>。本研究では牧野村の集落構成については、木村の研究に新たな知見を加えることが課題となる。牧野村の生業形態について、木村編では、近世に関しては、林産物や紬生産、農間渡世を含めた検討がなされているが、まだ検討の余地は残っている。近代に関しては明治期の養蚕・製糸業について若干の検討が行われているのみである。

なお、自治体史のなかで牧野村を扱ったものとしては、藤野町史編纂委員会編<sup>8)</sup>があるが、牧野村に関しては、断片的に言及されたり、一部の史資料が収録されたりしているにすぎない。また、私家版の郷土誌として、『旧牧野村郷土誌』<sup>9)</sup>がある。牧野村の歴史に関して貴重な内容を多く含んでおり、看過できないものであるが、出典が明記されていない内容が多いのが惜しまれる。そのため本研究では適宜参照するにとどめた。

## Ⅱ. 近世～近代における牧野村の集落構成

### （1）近世における牧野村の集落構成

複数の集落によって構成される牧野村の集落構成は、近世にはすでに確認できる<sup>10)</sup>。『新編相模国風土記稿』において牧野村を構成するそれぞれの集落は「小名」とされ、近世における津久井県<sup>11)</sup>の小名について考察がされている。木村によれば、近世後期における津久井県の小名は10戸前後から20戸前後を包括する集落とされている<sup>12)</sup>。

近世における牧野村は、「組」あるいは非公式に「村」と称される16集落に分かれていた。各集落には組頭が置かれ、集落はいくつかの組によって構成されていた<sup>13)</sup>。牧野村16集落を束ねたのが名主神原家である。かつて、神原家は駿河国蒲原城主であり、今川家に仕官していた。今川家滅亡後に牧野村に移住して帰農したが、慶長9（1604）年に代官伊奈忠次に見いだされて大久和に20貫文の土地を与えられ、以後牧野村全体の名主を代々務めた<sup>14)</sup>。

奥牧野において、名主神原家の下で牧野村の村政に当たっていた組頭を務めた家の一つが加藤家である。加藤家は奥牧野で組頭を務めていたとされる家である。屋号を「コジモ（古霜）」と称し、かつては有事の時に農民を率いて出陣するために数本の槍を自宅に保管していたという。また、同家は甲斐国武田家の遺臣であるとの伝承が残る<sup>15)</sup>。

第1表は近世における牧野村の村明細帳・村絵図に記載された集落名をまとめたものである。元

第1表 村明細帳・村絵図にみる牧野村の組の変遷

	村明細帳 (村鑑, 書上帳)			牧野村絵図		
	元禄12 (1699) 年	享保19 (1734) 年	天保6 (1835) 年	寛政10 (1798) 年	文化11 (1814) 年	文政5 (1822) 年
大久和	○ (1)	○	○	○	○	○
馬本	○ (9)	○	○	○	○	○
あら田 (新和田カ)	○ (4)	-	-	-	-	-
吉原	○ (14)	○	○	○	○	○
堂地	○ (15)	○	○	○	○	○
大鐘	○ (15)	○	○	○	○	○
小津久	○ (13)	○ (尾続)	○	○	○	○
奥牧野	○ (40)	○	○	○	○	○
舟久保	○ (5)	-	-	-	-	-
綱子	○ (8)	○	○	○	○	○
大川原	○ (8)	-	○ (大河原)	○	○	○
長又	○ (9)	○	○	○	○	○
菅井	○ (14)	○	○	○	○	○
伏馬田	○ (22)	○	○	○	○	○
小舟	○ (17)	○	○	○	○	○
川上	○ (13)	○	○	○	○	○
中尾	○ (18)	○	○	○	○	○
ひなて (日向)	○ (2)	-	-	-	-	-
篠原	○ (67)	○	○	○	○	○
まきめ (牧馬)	○ (7)	-	-	-	-	-

注) ○は記載あり, -は記載なしを示す。元禄12年の括弧内は家数を表す。

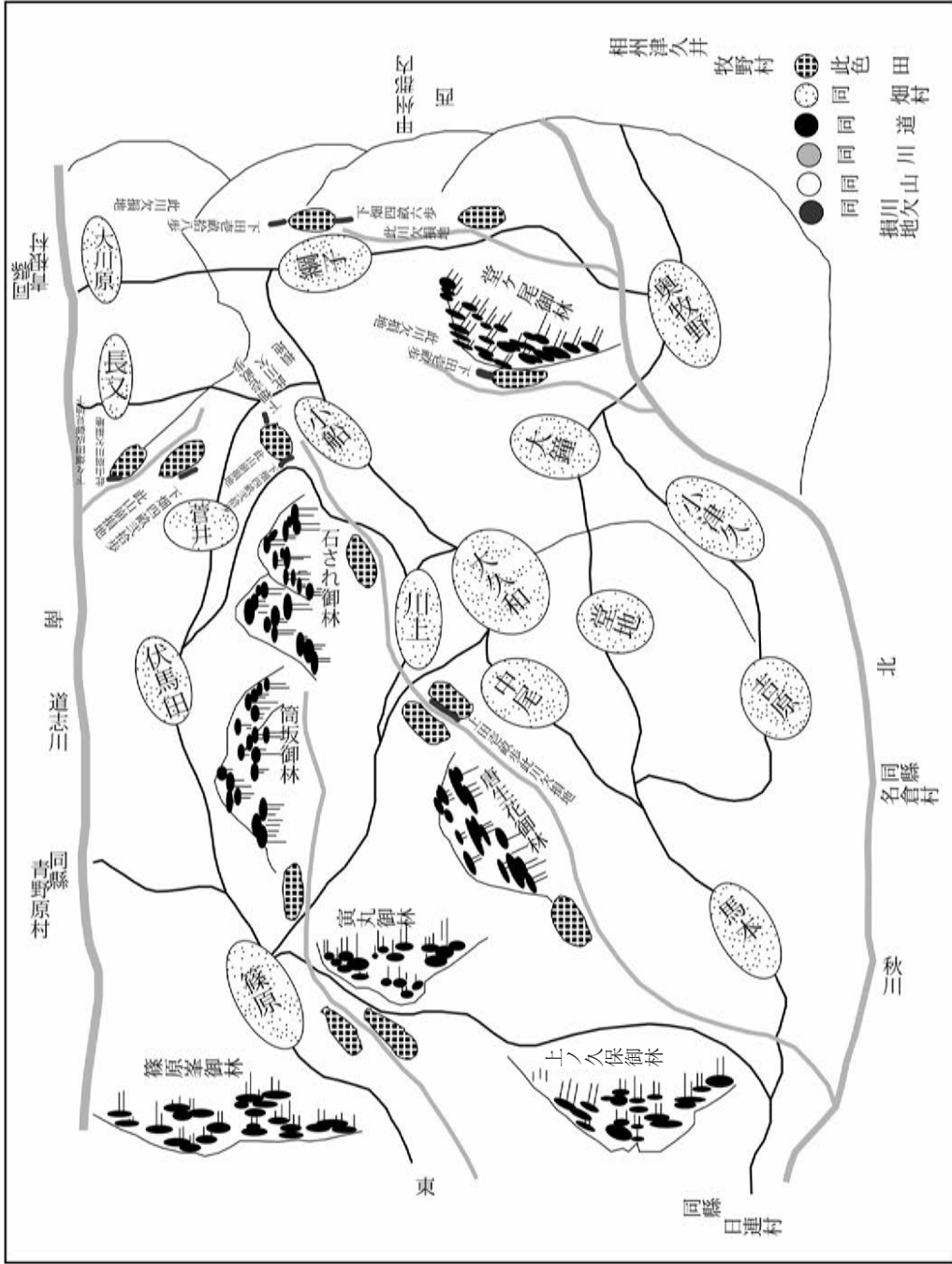
(『相模国村明細帳集成 第二巻』、『藤野町史 資料編 上』、『ふじの町史研究誌 第5号』, 神奈川県立公文書館寄託神原武男家所蔵「牧野村郷絵図下書」(寛政10年), 「牧野村郷絵図」(文化11年)「牧野村絵図」(文政5年)により作成)

元禄12年の「相州津久井牧野村書上帳」<sup>16)</sup>には、牧野村枝郷として大久和・馬本・あら田・吉原・堂地・大鐘・小津久・奥牧野・舟久保・綱子・大川原・長又・菅井・伏馬田・小舟・川上・中尾・ひなて・篠原・まきめの20の枝郷が記載されている。一方、享保19(1734)年の「津久井県牧野郷村鑑」<sup>17)</sup>以降の村明細帳<sup>18)</sup>, 村絵図においては一貫して、あら田・舟久保・ひなて・まきめの4集落を除いた16集落のみが記載されている。また、明治6(1873)年以降、牧野村には村社として八幡神社があった<sup>19)</sup>一方で、天保6年の「牧野村明細書上帳」には「宮」の項目があり、稻荷宮、八幡宮、山神宮などの宮が安国寺持・蓮乗院持・福寿院持で合わせて123が記載されている。その内訳をみると、篠原28、伏馬田8、菅井5、長又3、大川原1、綱子4、奥牧野8、小津久3、大鐘11、吉原6、馬本7、中尾15、川上3、小舟4、

大久和15、堂地5となっている<sup>20)</sup>。

第2図は文政5(1822)年の「牧野村絵図」<sup>21)</sup>である。大久和・馬本・吉原・堂地・大鐘・小津久・奥牧野・綱子・大川原・長又・菅井・伏馬田・小舟・川上・中尾・篠原の16の組が記載されているが、集落名の周辺は畑の凡例で塗り分けされ、凡例においても「畑村」とされている。また「牧野村絵図」においては、「畑村」の他に、田・道・川・山・川欠損地が描かれている。特に、山については近世に牧野村に存在した御林については塗り分けに加えて、樹木を描いている。また川欠損地は、川欠あるいは山崩れによって損地となった田畑の等級と面積を記載したものである。

元禄12年の「相州津久井牧野村書上帳」には20の枝郷が挙げられているが、享保19年以降は16集落として記載されている点について、文化5(1808)年「寛文四年辰御繩屋敷覚」<sup>22)</sup>によって



第2図 牧野村絵図一文政5(1822)年  
 (神原武男家所蔵「牧野村絵図」により作成)

検討してみよう。「寛文四年辰御繩屋敷覚」は、元々寛文4（1664）年に調べた屋敷地の書上を文化5年に写した、あるいは加筆・修正したと推察される資料である。「寛文四年辰御繩屋敷覚」には、全39筆の屋敷地の内、加藤家が組頭を務めた奥牧野の屋敷地34筆、舟久保の屋敷地5筆が記載されている。この屋敷地の筆数は、「相州津久井牧野村書上帳」に記載されている奥牧野40軒、舟久保5軒の家数とほぼ同数である。このことより、享保19年以降の村明細帳・村絵図に記載されていない、舟久保を含む4集落は集落として消滅したわけではなく、記載がされていないだけで存続していたと考えられる。

享保19年以降記載がない集落の家数は、あら田（新和田）4軒、舟久保5軒、ひなて（日向）2軒、まきめ（牧目）7軒と、いずれも家数10軒に満たない小規模な集落であった。そのため、実際の村政においては隣接する集落に含まれる形式で以降も存続していたと考えられる。また昭和26（1951）年の『牧野村勢要覧』<sup>23)</sup>においては、「末端行政の事務連絡のため村内部落を22区に分られ」として、22区の部落区を挙げている。ここにおいて名前が挙げられている部落区は、篠原を上・中・下の3つに、奥牧野を上・下の2つに分けている。22部落区に新和田・舟久保・牧目は挙げられているが、日向は挙げられていない。当時において日向については隣接する中尾に含まれていたと推察される。

一方、元禄12年時点において挙げられていた20の枝郷は、中世以来のいわば自然村の姿であると推察されるが、「小田原衆所領役帳」<sup>24)</sup>には津久井衆として、「牧野之村 四拾六貫文 井上主計助」と記載があることから、戦国期にはすでに中世に成立した複数の自然村を包括するかたちでの牧野村が成立していたと考えられる。また、同資料には、牧野村以外にも、千木良之村・与瀬之村・吉野村・沢井村・佐野川之村・小淵之村・日連之村・那倉之村・青根之村・鳥屋之村・青山之村・若柳之村・三加木之村・中村・長竹之村・大井村の16の村の名前が奥三保の中では津久井衆として

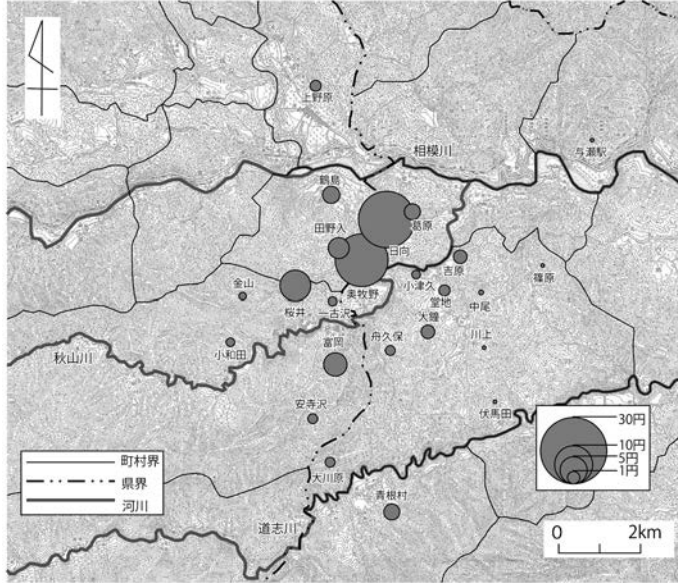
挙げられている。

## （2）明治末期・昭和初期における「香料受納帳」にみる牧野村の集落構成

加藤家には「明治四拾四年 香料受納帳」「昭和拾四年 御香料受納帳」が残されている。同資料において、「香料」は、金銭と白米1升、砂糖1斤、清酒1斗など直接物品を贈られた場合に分けて記載されている。また、金銭の場合、香典以外に「白米代」「色代」「酒代」「葬儀代」「病気見舞い」などの名目もある。これらから明治44（1911）年、昭和14（1939）年において加藤家が周辺地域とどのような結びつきを持っていたかがわかる。

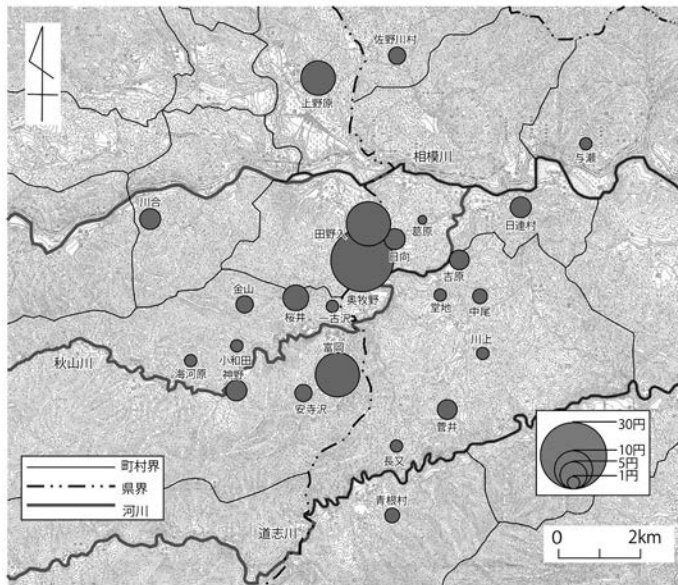
まず、第3図は明治44年の香典等の受取り範囲を示したものである。明治44年においては259件の記載があり、加藤家が受け取った金銭の合計金額は77円62銭である。最も合計金額が多いのは、名倉村日向の21円48銭であり、全体の27.7%を占める。加藤家のある奥牧野は、18円58銭であり、名倉村日向に次いで全体の23.9%である。また、奥牧野は牧野村において山梨県と接する地域であることから、上野原町、秋山村富岡・桜井などの山梨県側との結びつきが強いことがわかる。津久井郡内においては、隣接する名倉村以外に与瀬駅、青根村からも香典等が贈られている。一方で村内においては、舟久保、小津久、吉原、堂地、大鐘、中尾、篠原、川上、大川原、伏馬田から金銭が贈られているが、吉原・大鐘の1円20銭を除いては、いずれの集落も合計金額は1円に満たない。

次に第4図は昭和14年の香典等の受取り範囲を示したものである。昭和14年においては183件の記載があり、加藤家が受け取った金銭の合計金額は214円30銭である<sup>25)</sup>。最も合計金額が多いのは、東京の101円である。これは同じ加藤姓の人物が贈っていることから、加藤家の親族と推察される。同様に神奈川県横浜市鶴見からも2円50銭が贈られており、こちらも加藤家の親族であろう。奥牧野は26円20銭であり、第3図に示した範囲としては最も合計金額が多い。次いで山梨県秋山村



第3図 明治44（1911）年における加藤家の香料受取範囲  
注）不明分は除く。

（加藤景末家所蔵「明治四拾四年香料受納帳」，5万分の1地形図「五日市」（明治40年測図）  
「上野原」（明治41年鉄道補入）「松田惣領」（明治29年修正）」により作成）



第4図 昭和14（1939）年における加藤家の香料受取範囲  
注）不明分は除く。他に東京101円，鶴見2円50銭。

（加藤景末家所蔵「昭和拾四年御香料受納帳」，5万分の1地形図「五日市」（明治40年測図）  
「上野原」（明治41年鉄道補入）「松田惣領」（明治29年修正）」により作成）

富岡13円20銭，山梨県島田村田野入13円と続く。明治44年同様に，上野原町，秋山村などの山梨県側との結びつきが引き続き強いことがわかる。昭和14年においては新たに，山梨県秋山村神野，同県同村海河原，津久井郡佐野川村，同郡日連村，牧野村菅井，同村長又が加わっているが，明治44年と比較して金銭が贈られなくなっている集落もある。一方で村内においては，菅井，長又からの贈呈がみられるようになった一方，舟久保，小津久，大鐘，大川原，伏馬田はみられなくなった。

明治44年，昭和14年いずれの香料帳においても奥牧野を単に「村」とのみ記している。集落を「村」と表記することについては，文化11年・文政5年の村絵図にも見られる。部落を非公式に「村」と称することは木村<sup>26)</sup>や有光・千葉<sup>27)</sup>によって指摘されているが，牧野村において非公式に「村」と称することは少なくとも近世から昭和戦前期まで継続していたことがわかる。小名，組などと呼ばれる集落単位が最小単位の共同体であった一方，牧野村村内においては元禄期における枝郷に相当する集落が，近代以降もその存在が認識され続けていたことがわかる。また，奥牧野の加藤家の交際範囲は奥牧野が牧野村において山梨県と接する地域であることも関係し，牧野村村内の他の集落よりも，上野原町や秋山村を中心とした山梨県側との結びつきが強かった。

### Ⅲ. 近世～近代における牧野村の生業形態

#### (1) 近世における牧野村の生業

第2表は近世における牧野村の耕地面積を示したものである。判読不能となっている箇所はあるものの，記載内容は享保19年「津久井県牧野郷村鑑」が最も詳細である。元禄期(1688～1704)・享保19年に田畑の面積に変化はなく，田4町1反8畝24歩，畑255町7反12歩である。天保6年は田がやや増加して4町8反2畝25歩，畑はやや減少して255町4反1畝20歩である。享保19年から天保6年の間にやや変化はあるものの，田畑の面積は大きく変化していない。一方，新田畑，山畑，

切替畑の記載がある年次もあり，新田開発や山畑<sup>28)</sup>，焼畑による耕地経営が行われていた。新田畑については，元禄12年の村明細帳に「寛文四年甲辰年，久世大和守様御知行所之節より段々五歩，七歩程つゝ古畑之畦二而新発仕候故<sup>29)</sup>とあり，新田の項についても同様の記載があり，寛文4年以降の関宿藩領の久世氏時代に田畑の畦畔に5，7歩ずつ新田開発を行っていたことがわかる。また，享保19年の村鑑によれば，畑では粟・

第2表 近世における牧野村の耕地面積

	元禄期 (1688～1704)	享保19 (1734)年	天保6 (1835)年
上田	— —	(0, 4, 0, 27) (5, 3, 1, 7)	— —
中田	— —	(0, 7, 8, 13) (8, 6, 2, 8)	— —
下田	— —	(1, 2, 3, 24) (11, 1, 4, 2)	— —
下々田	— —	(1, 7, 5, 20) (10, 5, 4, 0)	— —
田方	(4, 1, 8, 24) —	(4, 1, 8, 24) (35, 6, 2, 7)	(4, 8, 2, 25) —
上畑	— —	(15, □, 7, 17) (152, 7, 5, □)	— —
中畑	— —	(36, 2, 6, 9) (291, 1, 0, 4)	— —
下畑	— —	(48, 8, 2, 21) (144, 1, 3, 5)	— —
下々畑	— —	(140, 7[ ]) (420, □, 2, 9)	— —
畑	(255, 7, 0, 12) —	(255, 7, 0, 12) (1195, 8, 3, 5)	(254, 4, 1, 20) —
山畑	— —	(8, 0, 2, 4) (78, 4, □, 0)	— —
新田畑	(5, 9, 7, 10) —	(5, 9, 8, 11) —	— —
茅畑	(11, 7, 5, 15) —	(11, 7, 5, 15) —	— —
切替畑	— —	(0, 9, 1, 13) —	— —
屋敷	— —	(6, 5, 4, 2) (78, 4, □, 0)	— —

注) □, [ ] は判読不能を示す。上段は面積(町, 反, 畝, 歩)，下段は分米(石, 斗, 升, 合)を示す。  
(「津久井領諸色書上帳」(元禄年間)，「津久井県牧野郷村鑑」(享保19年)，「牧野村 明細書上帳」(天保6年)により作成)

第3表 近世期における加藤家の土地所有変化

	長左衛門		七郎兵衛		
	寛保3 (1744)年	文化5 (1808)年	文政元 (1818)年	天保10 (1838)年	安政2 (1855)年
下々田	(0.0, 4, 13)	(0.0, 4, 13)	(0.0, 4, 13)	(0.0, 4, 13)	(0.0, 1, 19)
	(0.2, 6, 6)	(0.2, 6, 6)	(0.2, 6, 6)	(0.2, 6, 6)	(0.0, 9, 8)
上畑	(0.1, 9, 3)	(0.1, 9, 3)	(0.1, 9, 3)	(0.1, 9, 3)	(0.1, 9, 3)
	(1.9, 1, 0)	(1.9, 1, 0)	(1.9, 1, 0)	(1.9, 1, 0)	(1.9, 1, 0)
中畑	(0.6, 3, 2)	(0.5, 6, 29)	(0.5, 6, 29)	(0.6, 5, 15)	(0.6, 3, 12)
	(5.0, 4, 5)	(4.5, 5, 5)	(4.5, 5, 7)	(0.5, 2, 4)	(5.0, 7, 2)
下畑	(0.1, 8, 13)	(0.1, 9, 6)	(0.1, 8, 1)	(0.2, 3, 13)	(0.2, 3, 13)
	(0.9, 2, 2)	(3.9, 0, 2)	(0.9, 0, 2)	(1.1, 8, 8)	(1.1, 8, 8)
下々畑	(1.2, 9, 20)	(1.3, 0, 2)	(1.2, 7, 17)	(1.3, 2, 19)	(1.3, 2, 19)
	(3.8, 9, 0)	(3.9, 0, 2)	(3.8, 2, 7)	(3.9, 5, 9)	(3.9, 7, 9)
山畑	(0.0, 9, 28)	(0.0, 9, 28)	(0.0, 9, 11)	(0.0, 9, 11)	(0.0, 9, 11)
	(0.1, 0, 0)	(0.0, 9, 9)	(0.0, 9, 4)	(0.0, 9, 4)	(0.0, 9, 4)
屋敷	(0.0, 6, 20)	(0.0, 6, 20)	(0.0, 6, 20)	(0.0, 6, 20)	(0.0, 6, 20)
	(0.8, 0, 0)	(0.8, 0, 0)	(0.8, 0, 0)	(0.8, 0, 0)	(0.8, 0, 0)
下々畑	(0.0, 0, 24)	(0.0, 0, 24)	(0.0, 0, 24)	(0.0, 0, 24)	(0.0, 0, 24)
	戊御高入 (0.0, 2, 4)	戊御高入 (0.0, 2, 4)	戊御高入 (0.0, 2, 4)	戊御高入 (0.0, 2, 4)	戊御高入 (0.0, 2, 4)
合計	(2.5, 1, 9)	(2.4, 7, 5)	(2.4, 2, 28)	(2.6, 2, 20)	(2.5, 7, 11)
	(12.9, 3, 3)	(12.5, 1, 8)	(12.3, 8, 0)	(13.5, 0, 3)	(13.1, 6, 5)

注) 上段は面積(町, 反, 畝, 歩), 下段は収穫量(石, 斗, 升, 合)を示す。

(加藤景末家所蔵, 各年における「長左衛門地寄帳」「七郎兵衛地寄帳」により作成)

稗・麦・芋・蕎麦・菜・大根を主に生産していたようである。

これらの田畑の面積をみると、近世における牧野村の耕地は畑が圧倒的に多い。田畑の等級別の内訳がわかる享保19年の村鑑によれば、牧野村の畑の面積の内の少なくとも140町7反を下々畑が占めている。次いで下畑, 中畑, 上畑の順に多い。畑に比べると面積が少ない田についても、最も多いのは下々田であり、下田, 中田, 上田の順に多い。田畑の等級をみると牧野村の耕地は条件の良い耕地に乏しく、大部分は条件が悪く等級の低い耕地であった。また、享保19年の村鑑によれば、石盛は上田1石3斗, 中田1石1斗, 下田9斗, 下々田6斗, 上畑1石, 中畑8斗, 下畑5斗, 下々畑3斗, 山畑1斗, 屋敷1石3斗である。一般的な石盛と比較すると田畑のいずれも低い石盛となっており、牧野村の土地生産性の低さがうかがえる。

村内の耕地の大部分が畑であり、なおかつ土地生産性が低い耕地が多い牧野村であったが、一方で林産物の生産や養蚕、織物業が近世にはすでに発達していた。文化・文政期(1804~1830)における牧野村の年貢皆済目録<sup>30)</sup>によれば、漆の物納・金納, 袖売上運上, 水車運上が貢租として賦課されていた。漆は浮役正漆納として9貫830匁, 浮役代永納9貫313匁3分が賦課されていた。漆は津久井県における特徴的な貢租であり、賦課と上納の方式は変化するが、近世初頭から幕末にかけて一貫した貢租である<sup>31)</sup>。袖の運上は7貫160文, 水車運上は658文であった。水車運上は5か年ごとに更新されたようであり、文化・文政期より前になるが「安永六年四月 牧野村 水車改書上帳」<sup>32)</sup>によれば、安永6(1777)年当時牧野村内にはいずれも搗臼を備えた水車が13輛あり、「持主共雑石仕候計二御座候」とあることから雑穀類をついていたと考えられる。



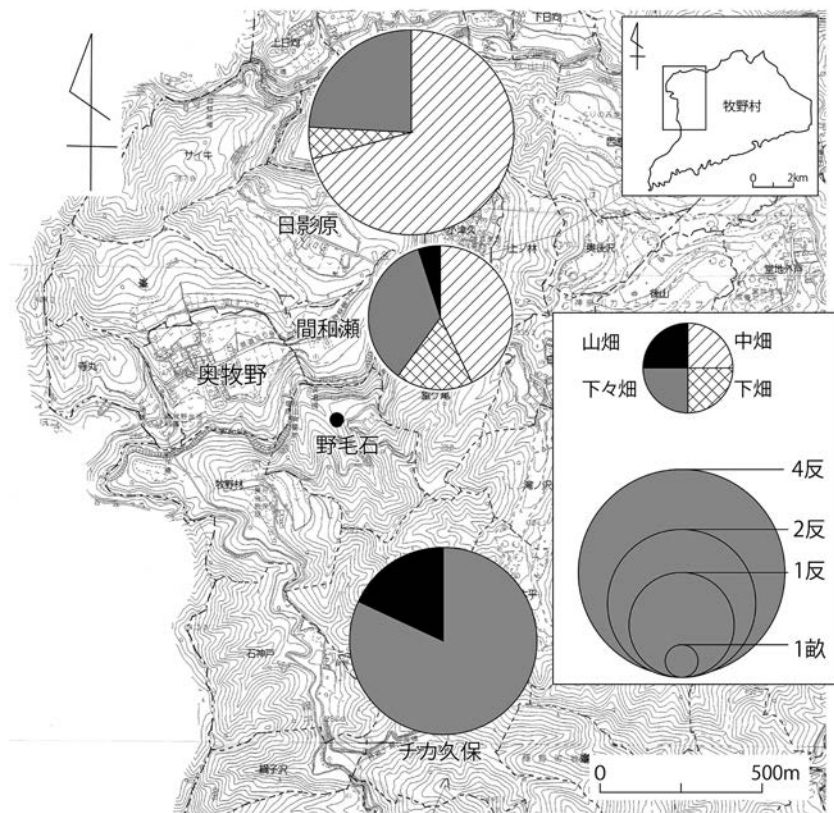
また天保9年の村明細帳によれば、「農間之稼」として、「白炭焼出シ売捌」とあり、漆・紬の生産の他に農間余業として製炭も行われていた。土地生産性の低い農業条件であった牧野村では、近世期から漆、紬、製炭といった農間副業が発達して生計を成り立たせていた。

現在加藤家には長左衛門、七郎兵衛、弥兵衛の3名分の地寄帳が残されている。このうち、長左衛門と七郎兵衛の地寄帳は、年次が異なっているが、土地所有状況において大きな差異はなく、同家の連続した土地所有と考えられる。いずれも、全体の土地所有は2町5反程度で推移しており、家族経営の規模を越えて、下人や隷属農民による耕地経営をしていたと考えられ、牧野村における有力百姓の一事例と位置づけられる(第3表)。

地目別でみると、その大部分が畑であり、田は

下々田がわずかに4畝程度あるのみである。畑は、上畑約1反9畝、中畑約5反6畝～約6反5畝、下畑1反8畝～2反3畝、下々畑約1町3反、山畑約9畝である。畑の中で最も多い地目は、下々畑であるが、その多くは質地流れによる土地集積の結果であると考えられる<sup>33)</sup>。畑が大部分を占め、またその多くが下々畑である状況は、牧野村全体の耕地面積の割合と共通している。

文化5年の長左衛門地寄帳に記載されている92筆の内25筆について、現在の小字と対応させたものが第5図である。一部を対応させたに過ぎないが、地目と地形との関係性をみることができる。日影原・間和瀬は奥牧野周辺において緩傾斜地であるため、日影原は中畑26畝12歩、間和瀬は中畑8畝23歩があり、山間の牧野村において耕地として好条件であったと考えられる。一方で、奥牧野



第5図 加藤家の土地所有－文化5(1808)年－

注) 全92筆の内場所が特定できた25筆のみ。(加藤景末家所蔵「奥牧野長左衛門地寄帳」、相模原市所蔵「相模原市字界図」により作成)

の南に位置する野毛石・チカ久保は急傾斜地が多いため、野毛石は山畑5歩、チカ久保は下々畑4畝13歩、山畑5畝18歩となっている。牧野村全体においても、上畑・中畑は集落の周辺や緩傾斜地に限られており、山がちな牧野村では斜急傾斜地に下畑・下々畑・山畑が広がっていたと考えられる。

## (2) 明治～昭和初期の生業形態

明治期から昭和初期の牧野村の生業形態は、近世と同様、畑作中心の農業に、養蚕、製糸、織物業、そして、山稼ぎ（炭焼き、木材生産）が加わった形であった。畑は、桑園以外は、自給用の農作物の栽培が大部分を占めており、現金収入としては、養蚕と山稼ぎが重要な位置を占めていた。

まず、農業の基礎となる耕地面積について検討してみたい。『津久井郡土地一覽』によると、明治9（1876）年の田は9町6畝3歩、畑は236町7反9畝11歩、切替畑が31町3反12歩であった<sup>34)</sup>。これは近世（天保6年）に比べると田は約4町増えている。畑は切替畑を含めると約13町増えたことになる。この切替畑とは焼畑であったと考えられる。さらに、同資料によると、明治17（1884）年の耕地面積は9年とほぼ同じであるが、明治20（1887）年は、田が9町2反1畝20歩、畑が298町3反4畝23歩となっており<sup>35)</sup>、切替畑の記述がなくなった代わりに畑の面積が60町程度増えている。これは、切替畑自体がなくなったわけではなく、資料の記載様式が変わり、切替畑が畑に含まれるようになったためと解釈できる。その後の切替畑の変化がうかがえる資料はないが、全国的な傾向からすると、漸次減少に向かったと考えられる。昭和10（1935）年の『村勢概要』によると、田の面積は10町、畑は286町5反である<sup>36)</sup>。明治20年と比べて、田が1町増加し、畑が約12町減少している。

この田畑の利用に関して、桑園がどの程度あったかは重要な点であるが、具体的な面積は、昭和7（1932）年に130町あったことがわかるのみである<sup>37)</sup>。また、昭和26（1951）年の『村勢要覽』<sup>38)</sup>

によると、昭和25（1950）年の桑園面積は54町であり、これは戦時中の食糧増産のため、約半分に整理された結果であるとされる。そのことから、昭和戦前期には約110町の桑園があったことになる。昭和初期には110～130町程度の桑園があったとみなすことができよう。明治・大正期に関して牧野村の桑園面積は不明であるが、後述のように、明治初年に、牧野村では昭和初期と同程度の生糸を生産していることから、すでに相当程度の面積の桑園があったことが推測される。

桑園以外の普通畑の作物は、主として春夏作は、陸稲、雑穀、甘藷、秋冬作としては、小麦を中心とした麦類と馬鈴薯であった。これらのうち、明治から昭和初期に関して、具体的な作付面積が提示できるのは、大正3（1914）年以降の陸稲と麦類に関してのみである<sup>39)</sup>。まず、陸稲についてみると、大正3年の陸稲の作付面積は約1.6町である。それが大正8（1919）年には3町となり、同9（1920）年には38町に急増している。その後変動をしつつ、昭和10（1935）年には20町となっている。陸稲の面積は、大正後期に急増したといえる。これはこの時期の米価の高騰に対して、米を購入に頼っていた牧野村では、陸稲によって多少なりとも米を自給できるようにしようとしたためと考えられよう。代わって春夏作としては雑穀の作付が減少したと考えられる。

次に麦類についてみると、大正3年の小麦の作付面積は約81町、大麦は約47町、裸麦は約14町であり、麦類の合計作付面積は約141町である。それが、大正9年には小麦は約52町、大麦は約50町、裸麦は約15町となっており、小麦が30町程度減少している。結果として麦類全体の作付面積も30町程度減少している。その後、小麦の作付面積は増加、大麦と裸麦は減少の傾向にあり、昭和10年の小麦の作付面積は約61町、大麦は約33町、裸麦は約8町となっているが、麦類の作付面積の合計は約102町にまで減少している。麦類の作付面積は大正後期以降減少傾向にあるといえるが、これは桑園面積が増加した結果とみるのが妥当であろう。また、大正後期に小麦と大麦は同程度の作付

第4表 牧野村の繭と絹糸の生産量・生産額

	繭			絹糸		
	蚕期	生産量 (貫)	生産額 (円)	糸の 種類	生産量 (貫)	生産額 (円)
1870 (明治3)	春蚕	…	…	生糸	90.738	…
	夏秋蚕	…	…	屑糸	42.738	…
1871 (明治4)	春蚕	…	…	生糸	96.139	…
	夏秋蚕	…	…	屑糸	44.893	…
1872 (明治5)	春蚕	…	…	生糸	104.589	…
	夏秋蚕	…	…	屑糸	46.355	…
1925 (大正14)	春蚕	10,425	100,680	生糸	80.000	2,000
	夏秋蚕	8,410	70,240	屑糸	15.000	1,400
1929 (昭和4)	春蚕	8,390	59,956	生糸	89.000	1,335
	夏秋蚕	10,393	58,985	屑糸	18.000	1,300
1934 (昭和9)	春蚕	9,864	21,800	生糸	50.000	2,150
	夏秋蚕	4,085	8,856	屑糸	17.000	283

注) …はデータなし。

(1870～1872年の数値は、『神奈川県史 各論編 2 産業・経済』、1925～1934年の数値は、『藤野町史 (史料編)』所収の『村勢概要』により作成)

面積である時期もあったが、全体として大麦よりも小麦の方が作付面積は多い傾向にあったといえる。

牧野村全体の養蚕に関して明治～昭和初期の実態が判明するのは、昭和10年の『村勢概要』<sup>40)</sup>においてのみである。そこには、大正14 (1925) 年、昭和4 (1929) 年、昭和9 (1934) 年の村全体の蚕の掃立て量や、繭の生産量・生産額等が春蚕、夏秋蚕別に記されている。そのうち、繭の生産量・生産額を示したのが第4表 (左欄) である。表にみるように、この時期春蚕は約8,000～10,000貫、夏秋蚕は年によって差が大きく4,000～10,000貫の生産があり、春蚕・夏秋蚕合計でみると、約14,000～19,000貫の生産があった。また、昭和9年の農家戸数が468戸であったことからすると、同年においては、1戸当たり平均で約30貫の繭生産があったことになる。

ちなみに、昭和2 (1927) 年の「津久井郡大養蚕家百人鑑」<sup>41)</sup>には、牧野村の大養蚕家として5名の名がみられ、その名前と繭生産量は、池端古市 (222貫)、佐藤栄治 (199貫)、佐藤喜十郎 (182貫)、山崎高晴 (150貫)、加藤織之助 (149貫) である。繭の生産金額をみると、大正14年に比べて、

昭和4年、昭和9年にかけて、春蚕・夏秋蚕合計の金額は、約17万円から約12万円、約3万円へと急減している。これは周知のように昭和初期に恐慌で農産物価格 (とくに繭価) が暴落したことが大きく影響している。

製糸に関しては、明治初期の状況がわかる資料がある<sup>42)</sup>。それと昭和10年の『村勢概要』のデータをもとに、絹糸の生産量と生産額を示したのが同じく第4表 (右欄) である。第4表にみるように、明治3年～5年において牧野村では、生糸は90～100貫程度、屑糸は40貫程度生産されていた。これは津久井郡西部の村々のなかでは際立って生産量が多い。また、大正14年、昭和4年、昭和9年の生産量は、生糸は50～90貫程度、屑糸は15～18貫程度である。これらから、明治初期には大正末期から昭和初期よりも生糸や屑糸の生産量は多かったことがわかる。牧野村は明治初期から製糸業が盛んに行われていたといえる。そして、絹糸の生産量と繭生産量を単純に結びつけることはできないが、関連性があることは間違いなく<sup>43)</sup>、その点からは、明治初期にはすでに大正末期から昭和初期と同程度に養蚕が盛んに行われていたと想定できよう。また、桑園もそれに応じた規模で存

在したと考えられる。

近代の牧野村では、製糸業と関連して絹織物の生産も行われていた。近世において紬に対して課税がなされていたことは前章で指摘した通りである。明治期以降の牧野村では、川和縞<sup>44)</sup>の生産が行われており、明治10年の内国勸業博覧会には、183疋の川和縞が製造者・佐藤金次郎、出品人・神原市良右衛門の名で出品されている<sup>45)</sup>。絹織物に関して村全体の生産量・生産額の動向は不明であるが、明治21年の津久井郡では総戸数の72%が織物生産に従事していたということから<sup>46)</sup>、牧野村でも同様であったと考えられる。また、製品は川和縞が中心であったが、昭和12～15年に、牧野村では一時的にせよ村山大島緋が導入され生産されていた<sup>47)</sup>。

次に山稼ぎを検討してみよう。ただし、木材生産やそれに関連する収益に関するデータは得られないので、ここでは木炭の生産に関する検討にとどめざるを得ない。大正5年の『神奈川県津久井郡勢要覧』によると、牧野村の炭焼き窯数は52、木炭の生産量は185,400貫、生産額は11,126円であった<sup>48)</sup>。これは津久井郡内では、窯数では鳥屋村の109、青根村の77に次いで3番目に多く、生産量・生産額では青根村の305,000貫、18,200円に次いで2番目に多い。津久井郡内でも木炭生産が盛んな村であったといえる。

また、近世には水車に対して課税されていたように、牧野村内には水車が多くあり、明治23年の『徴発物件一覧表』によると、村内には24の水車があった<sup>49)</sup>。

家畜については、同じ『徴発物件一覧表』によると、馬が79頭飼育されていたことがわかる。昭和10年の『村勢概要』では、馬は84頭、牛は80頭、山羊は41頭、豚は41頭がいたことが記されている<sup>50)</sup>。馬以外に関しては、それ以前のことは不明であるが、全国的な趨勢から、おおよそ牛は大正期頃から、山羊や豚は昭和期になってから飼育されるようになったものと考えることができよう。

最後に昭和10年の『村勢概要』により作成した第5表によって、牧野村の主要な農林産物の生産

第5表 牧野村の主要農林産物－昭和9年－

種別	生産量	生産額 (円)
米	466石	10,539
麦	4,375石	40,658
春蚕	9,864貫	21,800
夏秋蚕	4,085貫	8,856
生糸	50貫	2,150
屑糸	17貫	283
木炭	37,813俵	32,141

(『藤野町史(史料編)』所収の『村勢概要』により作成)

量・生産額を一覧してみたい。表にみるように、生産額の面で最も多い金額を示すのは約4万円の麦である。しかし、それはほとんど自給用であるため(米も同様)、現金収入となるのは蚕と絹糸、木炭である。そのうち、最も生産額が多いのは木炭の32,141円であり、木炭が重要な収入源となっていたことがよくわかる。ただし、先に見たように、昭和9年は繭価が下落した時期であり、繭価が下落する前の大正14年においては、繭の生産額は年間17万円に達していた。このことから、明治・大正期においては、牧野村では養蚕が非常に重要な現金収入源となっていたことがうかがえる。

#### IV. 昭和20年代における牧野村の農業

##### (1) 『村勢要覧』にみる農業の概要

昭和26年の『村勢要覧』<sup>51)</sup>によると、昭和25年10月1日現在の国勢調査では、牧野村の世帯数は509で、総人口は3,056人である。また、509世帯の内、農業世帯数は434で、総世帯数の85.3%を占めている。農業人口は2,746人で、村総人口の89.9%に達している。農業以外、林業、商業、工業、及びその他の就業者もあるがわずかである。

民有地の総耕地面積は257町8反2畝で、その内、田は12町2反、畑は245町6反2畝で、畑が圧倒的に多い。また、農業世帯(農家)当りの平均耕地面積は約5反9畝である。

434戸の農家の内、農業を専業とするのが18戸、

第6表 牧野村における主要農作物作付面積  
—昭和25年—

地目	農作物	作付面積(町,反)
田	水稻	11,1
畑(春夏作)	陸稲	36,6
	甘藷	15,8
	トウモロコシ	11,2
	粟	17,8
	大豆	17,2
	その他の雑穀	9,7
	蔬菜	15,1
	合計	123,4
畑(秋冬作)	大麦	29,8
	裸麦	8,2
	小麦	89,9
	馬鈴薯	11,7
	蔬菜	1,4
	合計	141,0
畑	葉煙草	4,8
畑	黄蜀葵	1,3
桑園	桑	54,0

(『村勢要覧』(昭和26年)により作成)

第一種兼業戸数は373戸、第二種兼業戸数は43戸である。小自作別にみると、自作農家は263戸、自作兼小作戸数は105戸、小作兼自作は40戸、小作は26戸である。また、農家を経営耕地規模別にみると、3反未満は77戸、3～5反は110戸、5～10反は196戸、10～15反は42戸、15～20反は7戸、20～30反は2戸である。

農作物は主に自家用作物と換金作物からなる。自家用作物は春夏作には水稻、陸稲、甘藷、雑穀(トウモロコシ、粟、大豆とそれ以外の雑穀)と蔬菜を主とするに対し、秋冬作は大麦、小麦、裸麦、馬鈴薯と蔬菜である。第6表にみるように、昭和25年の春夏作においては陸稲の作付面積が36町6反で最も多い。次いで粟、大豆、甘藷も多く栽培されている。冬秋作物では小麦が89町9反、大麦の29町8反、裸麦8町2反、馬鈴薯11町7反よりは著しく多い。

換金作物には葉煙草と黄蜀葵(タモ)があった。昭和25年の葉煙草の耕作戸数は48戸、作付面積は4町8反である。それに対して『村勢要覧』では、昭和26年の耕作戸数は56戸、作付面積は8町5

反、昭和27年は61戸、9町が見込まれている。徐々に増えていく傾向が認められる。黄蜀葵は紙の原料として栽培されていたものである。その昭和25年の耕作戸数は32戸、作付面積は1町3反、昭和26年は37戸、1町4反、昭和27(1952)年は37戸、1町4反が見込まれている。黄蜀葵栽培については、増加の傾向はとくにみられない。

葉煙草と黄蜀葵栽培以外の農業では、養蚕が農家にとって最も重要な現金収入源であった。戦時中は桑園の整理によって、食糧作物生産中心の農業に切り替えられ、陸稲、大麦、小麦、甘藷、馬鈴薯などの作付が増加した。その後、食糧事情の好転と相まって、養蚕が復活した。昭和25年の牧野村における養蚕戸数は春蚕202戸、初秋蚕129戸、晩秋蚕237戸で、桑園面積は54町であった。

畜産については、農林産物の搬運のため、昭和15(1940)年前は駄馬が100頭以上飼育されていた。昭和25年頃までには役肉牛や乳牛が増加していくとともに、馬が減少した。具体的には、乳牛が87頭、飼育戸数は75戸で、役肉牛は92頭、飼育戸数84戸であった。また、馬が14戸で計14頭飼育されていた。ほかに、豚、綿羊、山羊、家兔、アンゴラ兔、鶏なども多く飼われていた。

ところで、田の民有地は12町2反に対して、水稻の作付面積は11町1反であり、1町程度の差がある。畑の民有地は245町6反2畝に対して、畑の春夏作物の作付面積の合計は123町4反、秋冬作物の作付面積の合計は141町である。葉煙草と黄蜀葵の面積を合わせると6町1反であり、普通畑は多く見積もっても150町程度である。これに桑園54町を加えると、畑の作付面積は200町程度であり、245町の畑の民有地面積とは50町程度の差がある。この差は次に検討するように、山野が広く、傾斜地に畑が分布する牧野村では、山野や畦畔の見積面積が相当にあったことを意味すると考えられる。

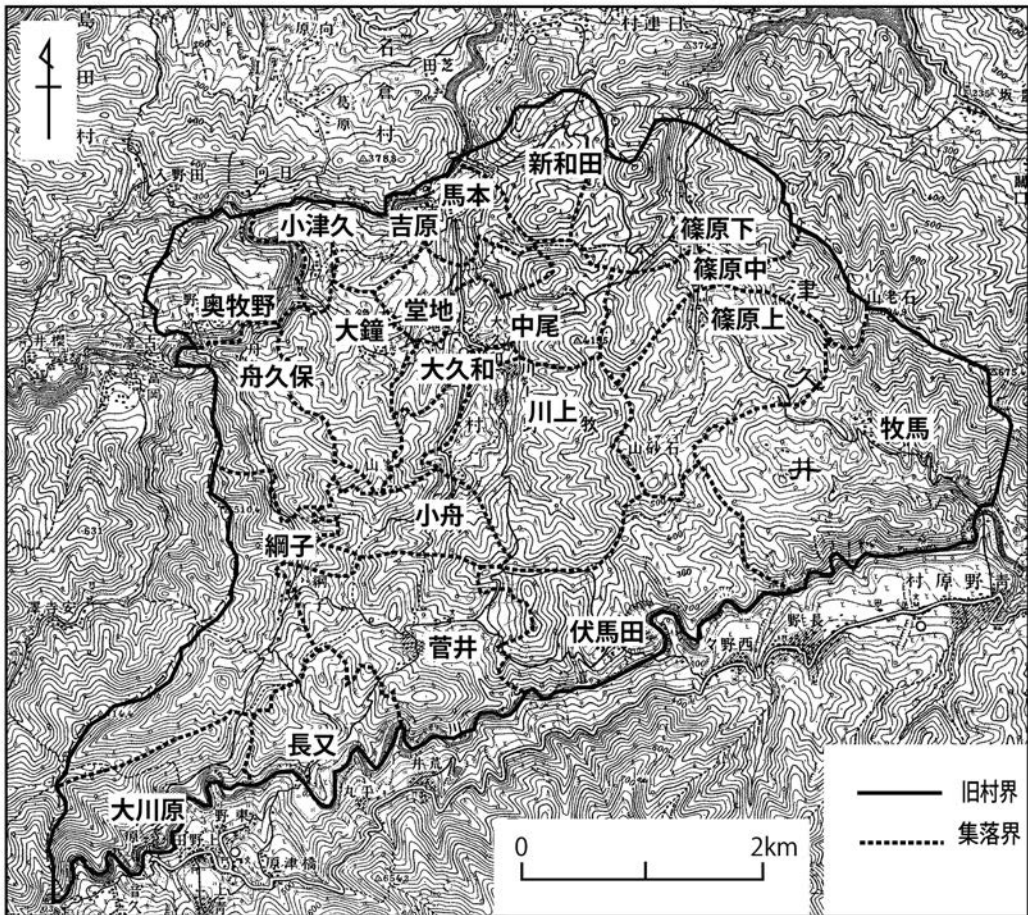
## (2) 集落別にみた耕地の分布

### a. 田と畑

既に指摘したように、牧野村は山間地域に位置し平坦地が少ないため、田が非常に少なく畑が多い。第6図は昭和20年代における牧野村の集落(部落区)の位置と境界を示したものである。昭和20年代の牧野村の農業に関する資料は、22の部落区(牧馬、篠原上、篠原中、篠原下、大久和、中尾、新和田、馬本、吉原、堂地、大鐘、小津久、奥牧野上、奥牧野下、舟久保、綱子、大川原、長又、菅井、伏馬田、小舟、川上)に分けて記されているものが多く、集落別の状況を検討すること

が可能である。まず、これと対照しつつ、昭和23(1948)年の『各部落耕地面積調査表』<sup>52)</sup>に記載がある牧野村における各集落別の田畑の分布を検討してみよう(第7図)。なお、ここでの畑には桑園、果樹園、永年作物の作付面積は含まない。

全体的にみると、田が比較的多い集落は舟久保、大鐘、大久和、川上、篠原上、篠原中、篠原下と菅井である。第6図によると、これらの集落では、舟久保、大鐘は秋山川が流れ、大久和、川上は川上川が貫流し、篠原上、篠原中、篠原下は篠原川が通っている。このことから、川沿いの低地が比較的多い地域には田が多い傾向がうかがえ



第6図 昭和20年代の牧野村の集落

注) 集落の境界は『村勢要覧』所収の図をもとにし、かつ各集落の小字名を参照して線引きを行った。奥牧野上と奥牧野下の境界は不明。

(5万分1地形図「上野原」(昭和22年資料修正)を使用)

る。

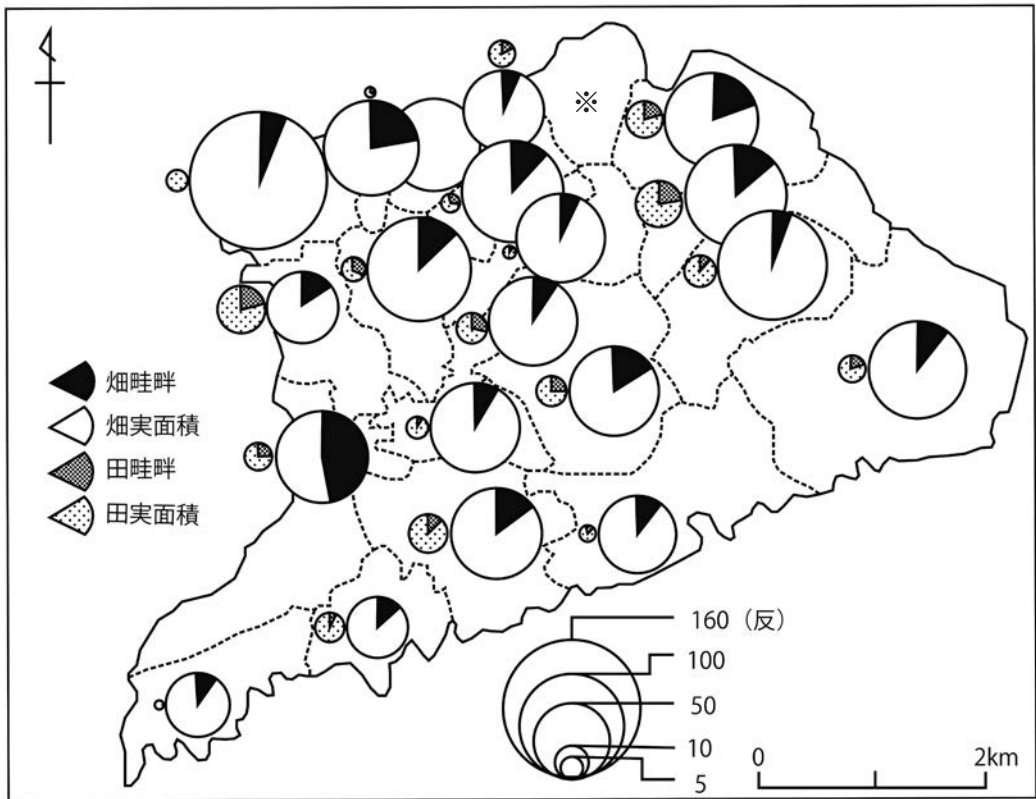
畑は奥牧野、小津久、吉原、堂地、大鐘、中尾、大久和、川上、篠原上、篠原中、篠原下、牧馬に多く分布している。地形上では、この地帯は緩やかな丘陵地である。これに対し、道志川沿いの斜面の傾斜度が高い地域に位置している長又、大河原、伏馬田などの集落は畑の面積が少ない。

耕地に関して顕著な特徴は畦畔が多いことである。特に畑畦畔の総面積は20町以上に達している。畦畔が多い集落は綱子、小津久、篠原上、篠原中、大鐘、菅井、堂地と川上である。特に綱子では、畑のほぼ半分は畦畔である。第6図から見ると、これらの集落に共通しているのは、集落は

川沿いあるいは道路沿いに立地し、耕地は川の浸蝕により形成された谷筋の傾斜面に分布していることである。傾斜面であるため、畑は段々畑や斜面の畑しか作ることができない。したがって、畑の間に大量な畦畔地が形成されたと考えられる。

#### b. 桑園

昭和23年の『勸業書類』<sup>53)</sup>によると、桑園面積は約54町で、その内、本地桑園面積（桑園実面積）が約44町、見積面積が約10町である。一方、昭和21年の『夏期基本調査 部落個人別集計表』<sup>54)</sup>に記載されている桑園「耕地ノ集田栽培ノ現在面積」は約44町、「散在的畦畔実地見積面積」は約2.8



第7図 牧野村の集落別田畑面積 - 昭和23年 -

注) ※新和田に関するデータなし。吉原に関する田と畑畦畔データなし。

奥牧野は資料では奥上と奥下に分かれているが、地図上での表示ができないため、合計して示した。

畑には桑園果樹園其他永年作物の作付面積を含まない。

(『各部落耕地面積調査表』により作成)

町である。両者の見積面積の差は、昭和23年の見積面積は、畦畔のほかに山野の桑園を含むためと考えられる。

第8図は昭和23年の牧野村集落別の桑園実面積、及びそれが畑実面積に占める比率を示したものである。なお、新和田については畑実面積のデータが欠けているので、比率が不明である。

桑園の実面積を見ると、奥牧野が最も多く、続いて、篠原上、川上、小津久、堂地、中尾、牧馬、篠原下、篠原中、に多く分布している。一方、舟久保、大鐘、大久和、小舟、綱子、大川原、長又、菅井、馬本などの集落では非常に少ない。

桑園の比率を見ると、最も比率が高いのは川上で、40%以上占めている。30%~40%の間にあるのが小津久、篠原下と伏馬田の3集落である。奥牧野、堂地、中尾、篠原上、綱子、大川原、長又、

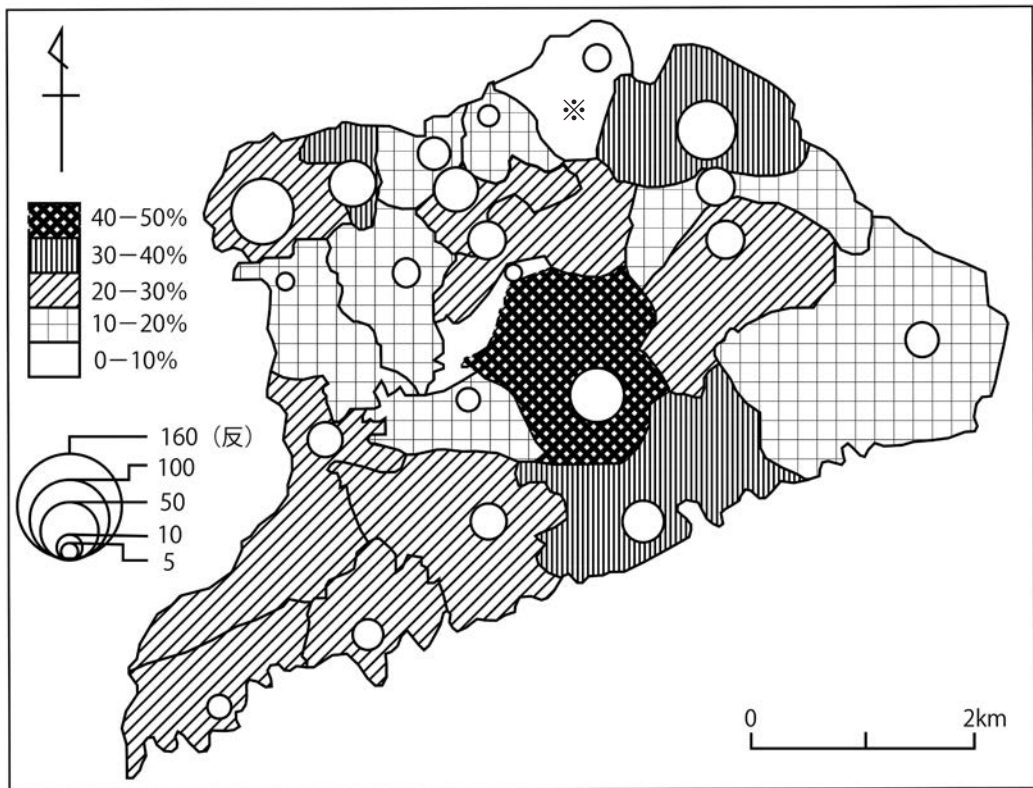
菅井では約20%~30%である。舟久保、大鐘、小舟、吉原、馬本、篠原中、牧馬では、10%~20%の比率で、大久和は最も低く、10%以内である。

桑の品種に関して、かつて津久井郡内で主に栽培されていたのは、改良鼠返（中生）、市平（早生）、魯桑（中生）、改良十文字（晩生）等であり、養蚕の時期、方法に合わせて植栽されていた<sup>55)</sup>。

### (3) 集落別にみた主要畑作物の作付面積

既に指摘したように牧野村における農業は、桑以外は自家用の食糧作物を中心に栽培しており、田では水稻、畑では、秋冬作は小麦をはじめ、大麦、裸麦、馬鈴薯などが、春夏作は陸稲、雑穀類、甘藷が主に作付されていた。

第9図は牧野村における主要畑作物の作付面積の比率を集落別に示したものである。図は昭和22



第8図 牧野村桑園（実面積）の分布と畑（実面積）における桑園の比率－昭和23年－  
注）※新和田は畑実面積のデータ欠。

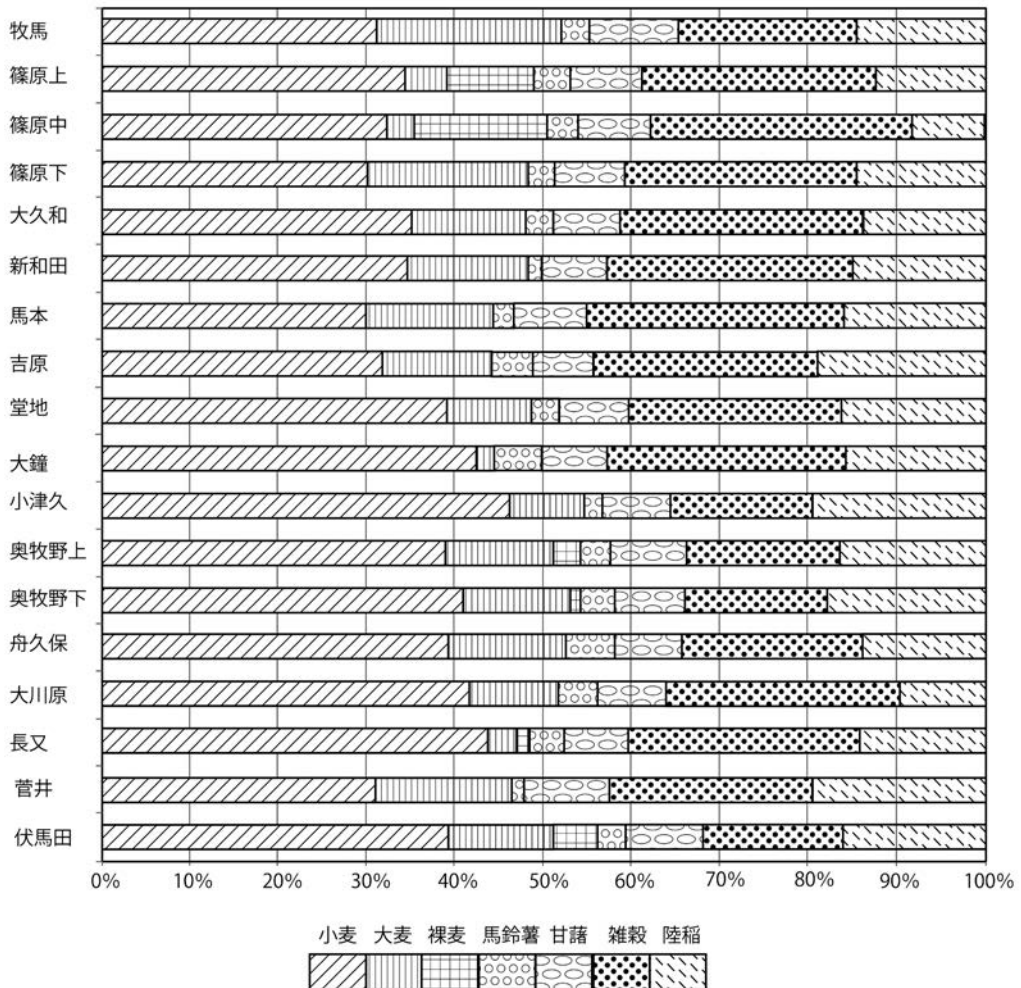
（『勸業書類』、『各部落耕地面積調査表』により作成）



年5月に行われた麦馬鈴薯作付面積に関する調査資料<sup>56)</sup>と昭和23年の資料<sup>57)</sup>に記録されている陸稲、雑穀、甘藷のデータにより作成した。本来は通年の作付面積のデータを用いるのが望ましいが、資料上の制約のため、夏作物と秋作物のデータには1年間のずれがある。しかし、主要畑作物の作付面積は短年間に於いて大きな変化がないと考えられよう。なお、第9図では22集落の内、すべての作物の作付面積のデータが揃っている18集

落のみ取り上げて示した。

第9図に示されるように、集落によって、麦類、イモ類、雑穀類、陸稲の作付面積の比率は地域によって多少異なっているが、大きな差は認められない。麦類の作付面積の比率は約45%~55%の範囲内にある。イモ類は10%前後で、雑穀類は15%~30%の間に集中しており、陸稲は少なくとも8%で、多くて約20%である。全体的には麦類が最も多く、その次が雑穀類で、イモ類が最も少ない。



第9図 集落別にみた主要畑作物の作付面積の比率

注) 大麦、裸麦、小麦、馬鈴薯は昭和22年、甘藷、雑穀、陸稲は昭和23年の作付面積の比率である。  
 (『麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査』(昭和22年), 『水陸稲雑穀管理台帳』(昭和23年), 『甘藷管理台帳』(昭和23年)により作成)

第7表 牧野村における主要農作物の平均反収

	年次	水稻(石)	陸稲(石)	粟(石)	甘藷(貫目)	馬鈴薯(貫目)	大麦(石)	小麦(石)
牧野村	昭和22年	—	—	—	—	287	1.27	0.63
	昭和23年	1.49	1.00	1.22	390	—	—	—
神奈川県	昭和22年	2.36	0.24	0.97	349	200	1.55	0.94
	昭和23年	2.21	1.22	1.30	420	358	1.80	1.30

注) 昭和22年神奈川県における陸稲の収穫量は疑問が持たれるが、原典どおりに反収を算出した。

—は資料上、数値の記載がないことを示す。

(『家畜頭数調査報告控他』、『麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査』、『神奈川県史資料編21統計』により作成)

集落別に見ると、麦類が多いのは牧馬、篠原中、小津久、奥牧野上、奥牧野下、舟久保、大川原、伏馬田で、いずれも畑の作付の半分以上麦類を作付している。麦類が最も少ない集落は馬本、吉原と大鐘で、畑面積の45%弱を占めている。イモ類は集落ごとにほぼ均等に作付され、差が非常に少ない。雑穀類については篠原中が30%に達しているのに対し、小津久、奥牧野上、奥牧野下、伏馬田では15%に止まる。陸稲は、作付比率が最も少ないのが篠原中で、多いのが小津久、菅井、吉原である。

第7表は牧野村における主要農作物の平均反収を示したものである。水稻、陸稲、粟と甘藷は昭和23年の『家畜頭数調査報告控他』<sup>58)</sup>に記されている生産目標の総収穫量、馬鈴薯、大麦と小麦は昭和22年5月の『麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査』<sup>59)</sup>における見込み収穫量を作付面積で割って得られた平均値である。昭和22年と昭和23年の資料は多少性格が異なるが、主要作物の反収はおおよそその値として妥当であると考えられる。また、各資料には集落別の見込みの反収も記されている。なお、表では比較のため、神奈川県平均反収を示した。その反収は、収穫量を作付面積で割って算出した平均値である<sup>60)</sup>。

牧野村の反収は、集落によっても異なる。水稻の平均反収は1.49石であるが、多い集落は1.55石あり、少ない集落は1.45石で、0.1石の差がある。また、これは神奈川県同年の平均値2.21石と比べてかなり少ない。陸稲については、平均反収は1.00石であるのに対して、大川原では0.85石、最

多の小津久では1.05石である。これらはすべて県の平均反収1.22石より下回る。粟の反収は、計算上は1.22石であるが、資料上ではすべての集落に1.35石という目標反収が記載されている。甘藷は各集落の生産目標反収は、算出した平均値と同じ390貫目である。この数値は県の反収420貫目より少ない。馬鈴薯は牧野村平均の生産見込み反収が287貫目であり、集落によっても大きな差異が存在する。反収の多い大川原では270貫目に達しているが、少ない牧目では100貫目にすぎない。全体として反収は150～200貫目反収の集落が多い。馬鈴薯に関しては県の平均反収と比べ、牧野村平均では上位である。大麦については、平均反収は1.27石であるが、多い小津久では2.5石に達し、少ない中尾では0.66石にすぎない。両地区の間に2倍以上の差がある。また、多くの集落では、反収は1～1.3石が一般的である。これは県の平均1.55石という反収より低い。小麦は平均反収が0.63石であるが、大久和、馬本、小津久では0.8石で、篠原上では0.4石にすぎない。多い集落と少ない集落の間に2倍の差がある。それ以外の集落では、反収0.6石前後の場合が多い。これらは県の平均値0.94石よりはかなり低い。

以上のことより、牧野村における主要農作物の反収は同時期の神奈川県における平均反収と比較して、馬鈴薯以外はすべて低く、牧野村の土地生産性はかなり低かったことがうかがえる。

#### (4) 主要作物の食物利用

牧野村の主要農作物とその食物利用について

は、藤野町佐野川下岩における聞き取りによって、大正末期から昭和初期にかけての食生活を再現した『聞き書 神奈川県の記事』所収の「津久井山村の食」<sup>61)</sup>が参考になる。佐野川下岩の事例は、津久井郡における山村生活を代表するものと考えられるので、ここでは、同書の記述をもとにして牧野村の主要作物の食物利用について検討してみよう。

牧野村では田の面積はわずかであった一方、畑で陸稲・麦類・雑穀等を多く栽培していた。そのため、日常食の米は陸稲が主であるが、大麦の割麦に米が1割ほど入った麦飯か、粟飯を朝食・昼食の分をまとめて炊いていた。行事食においては、白米や陸稲のもち米に小豆や十六ササゲを入れて蒸したおこわ、かて飯（混ぜご飯）を炊いた。また、大麦を丸麦のまま煮る「おぼく」も食され、夕食ではうどんが食されていた<sup>62)</sup>。小麦は水車で製粉して日常食のうどんとする以外に、夏の行事には酒まんじゅうをつくった。酒まんじゅうは大麦から麦麴をつくり、小豆をあんにして使っていた。

雑穀類の中では粟が大麦、小麦に次ぐ主要な穀類であった。日常食として粟飯とする以外にも、ハレの日に粟餅、粟おこわとして食されていた。大豆は味噌、醤油の原料としたほか、煮豆や砂糖ころがしとして食されていた。

イモ類は、甘藷、馬鈴薯、サトイモ、ヤツガシラなどであった。甘藷はふかしてお小昼とて食したり、煮物や干し芋を粉にしてさつまもちなどにしたりしていた。馬鈴薯は、「せいだ」、「男爵」や山梨県から入ってきた収量の多い「鳴沢」という品種が津久井郡の一部で生産されていた。せいだやサトイモは煮付けにして食べられていた。

#### (5) 奥牧野の世帯別にみた主要作物の作付面積

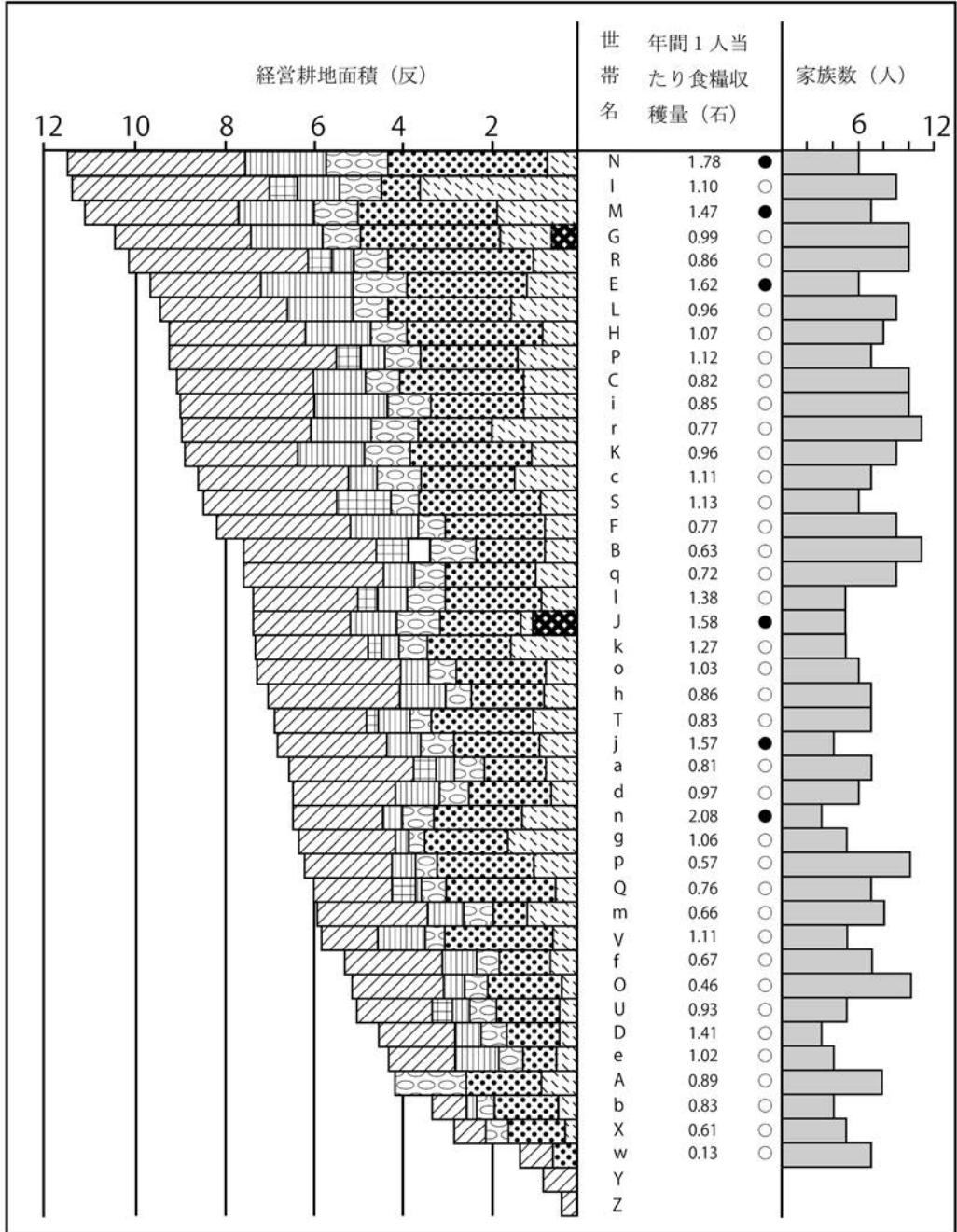
昭和22年の『食糧管理台帳』<sup>63)</sup>をもとに、奥牧野における世帯別の主要な食糧農産物（水稻、陸稲、雑穀、甘藷、大麦、裸麦、小麦）の作付面積を示したのが、第10図の左側のグラフである<sup>64)</sup>。

当時の奥牧野の世帯数は44戸であった。原資料では奥牧野上と奥牧野下に分けて記されており、図でアルファベットの太文字で示したのは奥牧野上の世帯、小文字は奥牧野下の世帯である。また、各世帯の家族数を示したのが右側のグラフである。

各作物の作付面積の合計をみると、2反未満が3戸、2～4反が2戸、4～6反が8戸、6～8反が15戸、8～10反が11戸、10反以上が5戸である。これらのうち、2反未満の3戸(w, y, z)は、非農家とみるのが適当であろう。これを家族数と対比してみると、作付面積の合計が6～7反くらいまでの世帯では、作付面積の大小と家族数の大小との間に、わずかながらも対応関係（つまり作付面積が多い程、家族数が多い傾向）が読み取れる。しかし、全体としてみるならば、家族数との相関関係は認めがたいといえよう。このことは、各世帯の食糧が自給自足されていたわけではないことを示しているともいえる。では、実際に各世帯において、食糧がどの程度確保されていたのかについて推定してみよう。

まず問題になるのが、年間1人당りに必要な食糧の量はどの程度であったかである。これを正確に見積もるのは容易ではないが、明治末期の茨城県では、米・麦・雑穀・いも類を合わせた年間1人当たりの食糧消費量は平均して1.46石であったという推計がある<sup>65)</sup>。明治末期の茨城県と昭和20年代の神奈川県の山間部とでは、時代背景も地域環境も異なるが、昭和20年代の津久井郡に関して、他に依拠すべきデータも乏しいことから、この消費量を目安にして考察を進めてみたい。

各世帯の各作物の作付面積は、図にみる通りであり、牧野村における各作物の平均反収は第7表に示した通りである。これらから各世帯の各作物の収穫量を算出した。なお、雑穀の収穫量は主たる雑穀である粟の反収でもって算出した。次に、算出された各作物の収穫量は租食糧（米の場合は玄米）としての量であるので、実際に消費される際の純食糧（米の場合は白米）の量を算出するには、歩留まり率を考慮する必要がある。各食糧の



小麦 裸麦 大麦 甘藷 雑穀 陸稻 水稻

●食糧が自給できたと推定される農家  
○食糧が自給できなかったと推定される農家

第10図 牧野村戸別の経営耕地面積と家族数及び年間1人当たり食糧収穫量  
注) アルファベット大文字は奥牧野上, アルファベット小文字は奥牧野下を示す。  
経営耕地面積には桑園を含まない。

(『秋作(米雑穀甘藷)夏作(麦馬鈴薯)食糧管理台帳』により作成)

歩留まり率は、精白技術や調理法によっても異なるので正確に見積もることは難しいが、ここで上記の明治末期の茨城県についての研究が、昭和38(1963)年の『三訂日本食品標準成分表』に基づいて歩留まり率を措定していることから、同じくそれに基づき、米 90%、大麦 60%、小麦 70%、裸麦 65%、粟 75%として、純食糧の量を算出した。なお、甘藷については、他の穀物と共通の単位(容積:石)に合わせるために、甘藷10貫=雑穀7.5升の換算率を用いて、粟の収穫量に換算して純食糧の量を求めた<sup>66)</sup>。このようにして得られた各世帯の純食糧の総量を家族数で割って、1人当たりの食糧の量を示したのが、第10図の中央に示された数値である。

これによると、明治末期の茨城県における年間1人当たりの食糧消費量1.46石を上回る世帯は、6世帯のみである。ただ、この結果は、上記のような推計方法によって得た数値であるため、かなりの誤差は考慮しなくてはならない。しかし、多くの世帯が自家生産の食糧だけでは家族の消費を賄えなかったことは確かと考えられる。その要因は、生産面では、耕地面積の狭小さや土地生産性の低さにあった。自給できない食糧は、養蚕や炭焼きなどの山稼ぎなどで得た現金収入で購入していたのである。

他方、自給が困難であったのは、一世帯当たりの家族数の多さも要因となっていた。図にみるように家族数が10人以上の世帯は8世帯もあり、奥牧野では平均家族数は7人であった。牧野村全体の平均の1世帯当たりの家族数は6人であり、それに比べると平均1人多い。耕地面積の狭小さや土地生産性の低さのなかで、家族数の多さは、養蚕や炭焼きなどによる現金収入によって支えられていたといえよう。

また、第10図において、家族数が6人の世帯に注目してみると作付面積の合計が約1町ある世帯Eの年間1人当たりの食糧収穫量は1.62石であり、食料を自給できたと推定されるが、作付面積が8.5反の世帯Sのそれは1.13石であり、自給できなかったと推定される。作物構成にもよるが、

牧野村の平均的な家族数6人の食糧を自給するには、主要な食糧作物の作付面積の合計は1町程度、経営耕地としては5反程度必要であったと考えられる。

## V. おわりに

本研究では牧野村の集落構成と生業形態について、近世～近代を通じた検討を行った。

牧野村は近世の藩政村として1村であるが、そのなかに、16以上もの集落を内包する1村多集落型の村である。近世初頭において集落(枝郷)は20あったが、一時期より村内は16の組に組織され、一部の集落は形の上では認められなくなった。しかし、それらは他の集落に合併されたり、消滅したりしたわけではなく、存続しており、明治期にもその存在が確認できた。そして、昭和20年代においては、それらを含めて22の「部落区」の存在が認められた。また、奥牧野集落の一家の例では、奥牧野が村の端に位置するというところに大きく関係するが、交際関係は牧野村内において強いというわけではなく、むしろ村を越えた集落間の方が強いことが明らかとなった。

生業形態に関しては、農業は、水田はほとんどなく、畑作中心であり、1戸当たりの平均耕地面積も約6反と狭小であること、そのため、近世以来養蚕や製糸、織物業、炭焼きなどを共に行い、生活を成り立たせてきたことを明らかにした。また、耕地面積当たりの土地生産性も低く、そのため、食糧の自給が困難で、多くの農家は食糧を購入に依存する部分が少なくなかったことが判明した。このような牧野村の事例は、耕地面積が狭小で、その土地生産性も低い関東地方西部山麓の山間村落の生業形態の典型例を示すものと考えられる。

## 〔付記〕

本稿の作成にあたり、加藤景末様には古文書の閲覧にてご協力賜りました。また、加藤久一様や加藤正仁様、神原武男様、長田正夫様はじめ牧野地区のみなさまには、貴重なお話を伺うとともに、大変お世話になりました。相模原市総務局総務部情報公開課、相模原市立公文書館では牧野支所文書の、神奈川県立公文書館では神原武男家文書の閲覧や複写撮影のご許可をいただきました。相模原市立博物館学芸員の木村弘樹様には、牧野地区の話者や資料の紹介をはじめ、大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

## 〔注〕

- 1) 津久井郡勢誌刊行委員会編『津久井郡勢誌』、津久井郡勢誌編纂委員会、1953、68頁。
- 2) 藤野町編・発行『藤野町史 通史編』、1995、252-256、289頁。
- 3) 神奈川県津久井郡牧野村役場編・発行『村勢要覧』、1951年（相模原市立公文書館所蔵）。
- 4) 木村 礎『日本村落史』、弘文堂、1978、335-352頁。
- 5) かつて人文地理学の領域では、藩政村が複数の集落から構成される村は、一村多集落型、あるいは須恵村型、煙山村型の村と称され多くの研究が行われた。それらの研究に関しては、上原秀明「農村社会の空間構造とその変容に関する一考察－甲斐国を事例として－」人文地理34-6、1982、23-50頁、浜谷正人『日本村落の社会地理』古今書院、1988、で詳しい紹介と検討がなされている。
- 6) 木村 礎編『封建村落 その成立から解体へ－神奈川県津久井郡－』、文雅堂銀行研究社、1970（初版1968）。
- 7) 前掲4）335-352頁。
- 8) ①藤野町編・発行『藤野町史 資料編 上』、1994、②藤野町編・発行『藤野町史 資料編 下』、1994、前掲2）。
- 9) 佐藤清明『旧牧野村郷土誌』、私家版、1996。
- 10) 『旧牧野村郷土誌』には、牧野村の集落の変遷が記載されている。同書によれば、寛永13（1636）年17集落、元禄2（1689）年20集落、正徳5（1715）年17集落、昭和20（1945）年19集落とされているが、いずれも出典は不明である。
- 11) 津久井地方は、元禄4（1691）年以降「津久井県」と称され、明治3（1870）年に「津久井郡」と改称された。
- 12) 前掲4）335-352頁。
- 13) 前掲6）162-164頁。
- 14) 前掲4）169-173頁。
- 15) 加藤家における聞き取り調査による。
- 16) 藤野町企画課編・発行『ふじの町史研究誌 第五号』、1996、63-67頁。
- 17) 青山孝慈・青山京子編『相模国村明細帳集成 第二巻』、岩田書院、2001、77-79頁。
- 18) 天保6年における集落の記載は、「牧野村 明細書上帳」（藤野町編・発行『藤野町史 資料編 上』、1994、327-335頁所収）における「堂」「社」の項目に記載されている組による。
- 19) 津久井郡文化財調査研究会編『津久井郡文化財神社編』津久井郡広域行政組合、1987、123-124頁。
- 20) 前掲8）①、327-335頁。
- 21) 「牧野村郷絵図下書」（寛政10年）、「牧野村郷絵図」（文化11年）と共に神奈川県立公文書館寄託、神原武男家文書。
- 22) 加藤景末家所蔵。
- 23) 相模原市立公文書館所蔵。
- 24) 杉山博校訂『小田原衆所領役帳』日本史史料選書2、近藤出版社、1969、133-142頁。
- 25) 「明治四拾四年 香料受納帳」においては初七日の香典も含まれていた。そのため、「昭和拾四年 御香料受納帳」においては初七日までを含めて集計した。
- 26) 前掲6）162-164頁。
- 27) 有光友學・千葉真由美「相模国津久井県牧野村篠原組善兵衛組文書（一）」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ人文科学5、2003、34-13頁。
- 28) 山畑についての詳細は不明であるが、近世の牧野村の生業の特徴より、薪炭や漆といった林産物供給を目的とした土地利用とも推察される。
- 29) 前掲16）65頁。
- 30) 「西御年貢皆済目録」（文化11（1814）年）、「戌御年貢皆済目録」（文化12（1815）年）、「亥御年貢皆済目録」（文化13（1816）年）、「卯御年貢皆済目録」（文政3（1820）年）、「辰御年貢皆済目録」（文政4（1821）年）、「巳御年貢皆済目録」（文政5（1822）年）、いずれも神奈川県立公文書館寄託神原武男家文書による。
- 31) 前掲6）141-159頁。
- 32) 前掲8）①、592頁。
- 33) 地寄帳には「〇〇より」と旧所有者が記されている場合があり、土地所有の変動があったと考えられる。
- 34) 小野沢清十 編・発行『津久井郡土地一覽』、1892、141頁。
- 35) 前掲34）143-144頁。

- 36) 『村勢概要 牧野村』1935 (前掲8) ②, 207-210頁所収)。
- 37) 前掲2), 736頁。
- 38) 前掲3)。
- 39) 神奈川県編・発行『大正3年 神奈川県統計書』, 1916, 244, 255頁所収の米と麦の市町村別統計による。なお、『神奈川県統計書』において、米麦の市町村別統計が掲載されるのは、大正3年版以降である。また、以下の本文における大正3年、8年、9年、昭和10年の陸稲と麦類の作付面積は、各年度の『神奈川県統計書』の米麦の市町村別統計による。
- 40) 前掲36)。
- 41) 前掲8) ②, 190頁, 所収。
- 42) 神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史 各論編2 産業・経済』, 神奈川県弘済会, 1983, 39頁, 所収の表6による。なお、同表は「養蚕記事吉野十郎」(吉野家文書)により作成されたものである。
- 43) 前掲6), 379頁には、明治6(1873)年の牧野村馬本組の個人別の繭と生糸の生産量の一覧表が提示されている。それからは、繭生産量の大小と生糸生産量の大小は相関があることがわかる。このことから、同書では「農民は繭を収納し、これを製糸する。一貫した家内労働によってこれが行われていることは疑いない」としている。
- 44) 川和縞とは、川和(津久井郡中野村の小字)で取引されていた織物を意味していた。前掲1), 90頁。
- 45) 明治文献資料刊行会編・発行『明治前期産業発達史資料 第7集(2) - 明治十年内国勸業博覧会出品解説(第四卷~六卷) -』, 1962, 244頁。
- 46) 前掲42), 45頁。
- 47) 前掲2), 737頁。
- 48) 前掲8) ②, 181頁。
- 49) 陸軍省編・発行『徴発物件一覧表 上(一)』, 1891, 59頁。
- 50) 前掲36)。
- 51) 前掲3)。
- 52) 『昭和三十二年九月調査 各部落耕地面積調査表』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 53) 『昭和三十二年勸業書類』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 54) 『昭和二十一年八月一日 夏期基本調査 部落個人別集計表』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 55) 津久井郡文化財調査研究会『津久井文化財 養蚕と炭焼 - 産業編 -』津久井郡広域行政組合, 1988, 19頁
- 56) 『昭和三十二年五月二十日現 麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 57) 『昭和三十二年産主要食糧 水陸稲雑穀管理台帳』, 『昭和三十二年産主要食糧 甘藷管理台帳』, (相模原市立公文書館所蔵)。
- 58) 『家畜頭数調査報告控他』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 59) 『昭和三十二年五月二十日現 麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 60) 神奈川県県民部県史編集室『神奈川県史資料編21 統計』神奈川県弘済会, 1979, 114-125頁。
- 61) 「日本の食生活全集 神奈川」編集委員会編『日本の食生活全集14 聞き書神奈川県の食事』農山漁村文化協会, 1992, 288-326頁。
- 62) 牧野村での聞き取りでも、大麦は「おばく」として食され、夕食はうどんであったことが確認できた。
- 63) 『昭和三十二年米穀年 秋作(米雑穀甘藷)夏作(麦馬鈴薯)食糧管理台帳』(相模原市立公文書館所蔵)。
- 64) この資料によると、奥牧野において水稲の作付面積が記されているのは、2世帯のみであり、その合計は1反6畝しかない。これは第7図で示した昭和23年における奥牧野の田の実面積が、3反8畝であることと比べるとかなり差がある。水稲に関しては記入もれがあったと推定される。畑作に関しては、同資料による大麦、裸麦、小麦の作付面積の合計値を、第9図で用いた同年の「昭和三十二年五月二十日現 麦馬鈴薯作付面積並予想収穫高調査」所収の数値と比較すると、ほぼ一致する。同資料に関して、水稲の作付面積に関しては疑問の余地があるが、畑作物の作付面積に関しては、おおよそ妥当であると考えられる。
- 65) 中西僚太郎「明治末期茨城県下町村の食物消費量 - 町村是の分析を通して -」人文地理 38-5, 1986, 445-460頁。
- 66) これは西川が紹介している、幕末の長州の『防長風土注進案』に記されている換算率である。西川俊作「移行期の長州における穀物消費と人民の常食」三田商学研究25-4, 1982, 130-154頁。明治末期の茨城県の食糧消費量を検討するにあたって、前掲65)もこの換算率を用いている。